俳諧一葉集

後編

二

へ 5
利
1258
7

俳諧一葉集消息之部

古学庵佛兮
幻窓湖中　編
坎窗久蔵　挍

一ハ消息よくてや楚ひ切にむかしき物を点ら行誠は古今ならず
能う詠んたりとも其ゟく相問書え手の千羽足の踏ものに似
しれはか様に古き文を見れてふへの消息をも少し写
随ふ事もいそいそけて折ら此秋の何りゝて一枝乃ぞしき
やさ露を振添をるもちくしふ為て能き花見老俳耳接と
叶ふべくし句作の手点は古来ゆうものくしみせしま我当の中
あのふ手作文備ゆゆらい見えしへ彩しまして手紙すめ

へ5

つくしより此地へハ[illegible]
白[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

三月十四日　　芭蕉庵桃青

東[illegible]子雅丈

桐[illegible]子雅丈

〇

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

季文廿六日　　[illegible]

小春雅文

御中ニ 十題をえらし前表の序とす 小嶋

○

道徳

そもそも道徳の二字をわけていはゞ心にある徳を安くして世の中の
人にほどこし天ハうへをおほひて月日ハ光をあかして花咲ら
鳥も鳴とハいつはりなき道にしてたゞ其時ハ風ふくのみにて
ものをそだつる生の徳をさとりて花ハ実を結びて道徳しれハ
うしめしハともにそれぞれにあるをさとりてたのしみなく
其しのぶんハ徳の時の心にさとへよろこびかたちを知て二
あやまりなきのうけとるためにもわぶんにすくて徳を元として先ハすて
其しかとハ物事に付ておんさとりしてさぶん其しめハ
して徳ある人ハ其すわりて他人も其や其実を何かう

実に徳ある人ハ実ありしてくわしく実の事をすなほ人を
わけ附てありて心にも其しも実の事を実ある事にや其ハ
虚実ハ虚実にしてまた自然ある人しもの其花のよりて節操に徳
いしも欲と肖の花をする人きしれして素より実をしもの事を
いはるにハましく実をしもして実をもとの事かかる聖人の実を
今の人も其ものにハさぶんや其事を事とハ門物を行ふ草
物の物ハ浪人を其ものハしめ物の物のみえ大いなる徳ハしもの
実にく実の徳を其もの手しく其物貧福ハ人の其しよする
一道徳の二道ハ其ハ是に何か其も是実を其の事を其もの其
ものゝは深く其しをもしハ其物ものしまた事をも物くは物
其ものの其をいはてして物まちやすき

三月廿日

其人記

惜無文

○

山里や桜さくらぬ山もうしと見し白山中の菊も余所に
けとされまだ春もの俤を色まし　飯田里の山もうちに
山かけゝしき山自のこしかたしくきやまを

くもの代

女角換

○

いま錦屋に大相家は坂東待役者におゐてなかにも一番の
名代なり末面々の役の拍付は大中さんこと名物にして
一つら添へ佛気に役者の取りしからぬ最後わしき枝のその
まゝも立れ一の下しや

秋の小石ぬれのみ見重もその名
さうけさやゑへのし了望みきうしく
四国将まくすなら任らしかなしく八の免おゝ白玳手おもふてと
丈を上りほしり

らめ

ちと代

白宇社兄

ら

○

一石清多瓶本坊清京の侍へ村り立家占あて至一の読時ら九八
年基さう七つつそ自しけ名そやうやん八
りん一のかくりみもの　のらま
千道のさ
さをしみさしろたお杯奇丹さ及ひうむうまこやひ待る志うし
家も一名をきんとくし狂奇れ山をもちて

弁慶も文もかみこの羽折哉

これは精一といふむかしの名ある人のはんてうけいぐらし

ちよ尼

○

一 かねて芳此御務ありし金子二分ゐのし下され押付まゐらせ

まいらせ候下されと承りまゐらせ候まへまゐらせ候

ちよ尼

○

当地ゆかり人附ある所にて此句をとめ井ゐ人名を事にて競給今に

木標

春へくも亭にて此仕味能く案じ候て内にてよみし事ともなく

定めて趣ひてくれるへき東武にてひろめし其のうち挿し

紀尾

附句

蒜のさくの水も手をさしあての花て

よしのにおちて

鳶の声のなかの鉢にとまりけり

二月上絃

ちよ尼

木因様

千代書

善悌あた人の付句を文ゐ候ゆへ願ひ候て候

様子承り候の及ゐに随ふ下さる事にて

事に候古今一枚起請切京中究る人あつめ候て文
の内をえらひて何れも御定めにて撰集等先に其文字人につかし
有様にて写しきみえし花洛にひろめて定めたる物に候
其古今　葉園集巻七
春霞供奉
蒜秋　きのふに鴬のねをきゝて侍りて
きのふの花の跡はおもはれ
木をはなれおとすおとすかな
二月六日　木因
はせを様
称美の詞

杭瀬川の舟にてうかすに寄せたらはきのふの白妙許也今は
よは深き人なからも六騎の舟にかの舟の心をも法のくへ奉り
は変えても残りしめし人三分同物に同物付る古今勢更
より続ける人二分是をあはれとおもひてもしもとくとし
外にも此学をも隠しつつしまて志を不察の士も一両人
にてしくきもの理をも論つゝ自撰となしくるくと称て是首
の五十余句にもあり木綾舟は是知る人も定めて八騎
料理人の不為を奉しく和更集一意の遠き人に
寛ふ侍ゐ
自撰の詞　木因
古拙至人若年桜を付てより同志古今をあつめて云り
ましてきまり鴬を付し一物と気を附て当時未来に

此者ハ此句を似せさせん古体今来ニ未一句の執いふとの時
う秋風来て芭蕉の露もなく隠れんやそれ一句一生こゝれ
のこに有るうらやしきから鼻高くおこ多くて肩の付さう
胴ふくれするやうにおもわるゝは

○

飲酒一枚起請

もろこし我の朝もろもろの上戸達の沙汰し申さるゝ酒もう
きにもあらす又かんをしていふ菜をのくて飲む酒にもあらす
只酒注生楽の為にハ南無阿弥陀仏と申して粕ハ必ず往生
すると思ひとりて一杯のむより外に別の子細ハ候ハす但三良
四修の肴なとゝ申すハ皆酒豪と決定して疑ひなき酒肴
乾さるゝやうち籠り候ハ此外におく深く酒の大盃は二尊のあはれ
みにはづれ本性をうしなひけんくわんをまきさん人ハ
たとへ一代の法をよく学すとも一文不知の愚鈍の身になしてハたゞ
学者ふるまひをせずして只一向に酒を飲へし
右飲酒一枚起請ハ常親鸞聖人の作のよしかたはしまる人の許より出
写して掛物にして床にかけおきしは何手のしるし面白きに似たり
ちよくに写し本ありしを又ある大酒家のもとより是も文句を
写して大酒ハ無用と存し例の一句

親の不幸なやめしなよ男ころ手
めて身をきるハやうしい同し所の葉で下るなり

十寸

廿角文

文線

○
きのふ和尚の世事ことに珍重存候　手紙満足ニ候以て
被下候御心中
一　是ハ元日の句
から崎の松は花より朧にて
山路来て何やらゆかしすみれ草
其外さし句もなく候　御座なく候
一　此秋比芭蕉の庵を出て　其の一のしらせ
くにあるく白海の事見え候かしく面白御座候
その所々にて候

一　貴翁の御事承候て　返事　[illegible]
かゝる事にて　[illegible]

扨々
一　深川与蕉庵にて　[illegible]
五月十二日　芭蕉　桃青
千那老僧

○
此比上洛　[illegible]
中　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
不　[illegible]

よしあしは詞一つにあり白菊芳香の初八京にも有酒白
京と宇治の椿菊花の比は京にて見に行くる事しめて人も見し枚
京にて茶屋にはらみ事にて

正月三日

ほうらい
そなはしきものハ銭ならずわれは米櫃ハ中けれどよき 芭蕉

はや一二枚ハちとも見ぬ事にて京なる能き見物るしくもよし

○

はやりうたも見物をしてみて先よりも流行るは宗匠らしく
うしおんの仕立は流しは其にて我けふ宗匠の京にて年中御席
は流行るは其の人まで流行る成人まで流れ流行る
このしとおり宗匠三物の句を見ては一句に書を(?)ぬ
まりぬるも手にて見にて其句をよき宗匠すがた筆

やとわれて精を出しては耳にもとまりてかはりては流行る
礼状は手紙

一町の花上着に仕付けて致させしうき世の中にてはなく八
此山のるしを知しの好むもの敷事て茶席うるさくて仕上げしは
箱やの暖かくて見に来て

一風雅の花筋大方世上に名高き点者て屋形を出て橘
屋とも申ひそかに尺けして候て知る老師の加わるは風雅の
道をも知る人にも点者の書き物をたとへ宮主の様を
思ふにしてし人の風をきんかまとるへし又そのかたをも今き
間にて点面は世上をはじめ人をいのんとりひに頼まれ二巻
三巻も点取勝ちるものは大か心よし点さる(?)ものはまたひて見る
代にも又一巻終わりよみて付る線香五分の間に工夫をさめ候

殊さら点取ものに與する事なれば俳諧の手のよみものにして
ひらしされども料理とともに人の腹を飽ましにして然れ共
其のをたのしみ点者を肥しむかしと是まさ芭蕉の一
筋にあらぬ人の又志をし勉め情をし慰めならぬ作の是非
をもかへりみられよ誠の道には入がたく思ふなれども
定家の骨を探り西行のすぢをたどり楽天が腸を洗
ひ杜子が方寸に入んと旅枕をかさねて十の指をも
まげ其も別に十の指にかぞへし師には猶師の書一巻も
一 彼通るのは大坂にして是を侭いひしも尤の事なり指居りしに
其志三年以前より尺し来るものにて尋ねれば夜はまたまた
西行能因の古風はあらずとてしかしく人の平生の人とは若の人
にも坐すのこととあさまし何れ不審ならんと其を御批点下され候て六

不通作はしくは仕事なりくてもなりとも風雅の事おかしけれ
あるべきなはなりもの乞食よりも劣るなれば

二月廿八日　　　さと代

曲水様

○

酒堂今は大坂にて此度上り頼まれしは中々御見舞をも不
申して北海洗のかきつけとやさきて
一 西国の弟子北枝の句判文して文中細も口申しきり何を申したも文通
不仕は事もものをいひさしてきみいはで北枝もたまたくれ
申しは此方いふらくて古人も御尋なさるべく候て知
もひそうつや候は

一 新今度ハ成人おゐて女子ゟ手習申候ハ

霜月一日　　　　　きく

母上様

○

芳翰拝見致し候先母様ハ内室もう兄子ゟ我等まて
めてたく存し候扨拙者指南も披露て其この日おし祝儀
まて申上候

一 乙御はしく入候付清書の事ハ精々手習ニ入して乙御方よりも伐候
のたもしを清書差上候拙者も安堵致候ひ穀蔵て

一 家化さるゝし候へハ何卒仕候てよくもし猶又ふかく大切の風
雅の道ハ第一ニいたし候へハ何卒ともよろしく人々の事

くれ〳〵も内と同じく第一ニ候て此度大坂の入口ゟ出
船とあり候て猶々此段ハ殊ニ存し候へハ猶又お頼申上候

一 同方へも御伝言被下候清書一紙相添さしあけ候て
私ハ居志穀蔵て第八拙者も学問致し候

一 其御方御地のうちに先ハ御中切にて御用被下度左様願上候

候て境界大変成ぬ様に深く御心得成され候て拙者も御承知
拙者まて沢山ニ清書の儀を御さし越され候へハ此の段何卒

八月の頃ともゝ拙者同じ事なき様ニ足の止る所ゟ参り候

みな〳〵の風の事よくとも相尋ね足袋の御荒も我等ぬれて

これハ人々中にも入〳〵申上候へく候

○

此魚の其外子らの事甲斐の山里まて引連れ候て苦労致し

くゝり新役のほと〻拝し中にさわくと被下候かの少〻便紙而
御手紙ニ大丈夫ニ候へ其木丈夫ニ候御紙ニ者く候へ由
名字と命しての心る古人とも〻のうつり名る〻ひ殊らしく
さのみをしうましくと存て御前あれし此度の新らしめれ
すやう御用たし承りてこれは可承候ほと〻候共恐惶謹言
のまれ

四月廿四日 ちよ代

小枝丈

御申 嬉しう存まいらせ候八蔵まいる 小枝

○

此君分より白米五斗差上候
一升俵ニいたし 越よとしの坂

かくれなくみゆる手紙ハ四季ニかりのすさみにて
さゝる手ニ候ヘハゆへ物おもひやられよくく
えゝや 昼の上手 米 たまわる 小枝
さして御ん料御代の下より伏ハうたとうけるうるのにつさん
うりかくにハ御代の八十武御と為お悦び情のあらハれ候
かく米俵八ツ元ニ御悦び深く被思御出来豆
果ミより悦ひ八名るて感悦なれともこれ合年
天下泰平の米豆多くと京大津の御心を致候

四月廿四日 芭蕉

小枝様

従人より蔵元に いえせう 御の事
御人よりも 申つか入候

茶を煮て行人にほどこすことも

○

然るハ昔より諸国所々に行はれ来りし事にて其人に少しも
女子の人を集め茶を煮て若の(?)をとりてくる人に茶を出して挨拶し
より一句を吟じて旅人に茶を吹てやりて悦びけり
唐の国も本朝よりも世にはれ施茶を甚だ多し
其諸国他の人ハ他く人にと茶を以て旅行にて見るべし
これも其々一杯の茶も旅人にハ何よりも甘露の物にて
人ハ謝礼致すべし殺生の罪も是より免れ諸国より
吹ハ飲ましくて勧め茶の功徳もなく又其功徳も
さきも他る人のさし出る渇きを何よりと申ハ
是より遠くし名にと心にて甚しう茶もつかくへし

風人に施して飲むれハ茶もし茶を以て殺生をさとすべし
或ハ施茶をはしめたる事も誠に人のため
守る人の回向によりて人を心付ける施茶をなして是れハ二百五十
年もこれハ其もの仏のはじめとして措餅少納の利益
ぬる茶を施す家の人も二はじまりてし武林寺中
其よりの家々の茶施す白鵰の詩あれば古利にても浄
加茂の家中の人にも茶の古き茶を吟ず茶の句
しらひもや餅に茶をする桜の花　芭蕉翁

二月十六日

一茶稿

又武士ハ殺生するものなれと主人の為に其急なるを捕へ縛
うまくすまへる出世のため可きにて名ある事しの旗ある

又ハ右これらのかはりめにて料理とする時ハ能々味ふへきなり

○

附合十七体お我に記して初心之人をおしへし御の付ぬ
うちに付味を付んといはし却て一句と論じ附意にこそあれぬ
されバもの又去はいきものなり付る味ハとても叶ものにも
退て人すくまるのしれ御付にて居て扱ひ只一たものにへこひ
甚むはうしき無る人の付くるをと哉ハ皆ゆるしひ八
情ふとまし發して付し変化なしろくめいさまれたへ
人ハおもは三句をおそれて付かるるハいつはしかるのみ
發しいハ初心に取て功者にして二三句を附る上手也
理に付るゝ者ニてかなとしてもてしくれてもの共能之
老の扱ふれて鬼に鉄棒とし有る門人の中に五七人

あつて此清發しおゐは前文の付合の御事にしるしけれど
人却て未達の事と存ぜんかくしやまもし八考へ十七体
を好ミ上ゟ変万化の御をはしるの事は只付て付ぬと心
又すたく初心て付合ハ千変万化とはもし人ゟ寄りしけれ
十七体の清をしるし得て句ことに千変万化の働の妙ある作
百韻千句にも及て附心一二体を出不申はかえるものハ吹ひ
小器ハとかく言る事が付くは人と付て通し事乍
あふ作品四五人目前のまま好みし互に作をそしり言う悟にぬ
かけらし八俳諧を遠ざかりて食と付られてこそ付く
の達者ゑゟとめしてら也

六月廿七日　素丸

此ふまへ出当年にて清書

小枝稿

名月を愁ひ侍りまされ我てらぬがりニタ八まさいつもと定め
かさんば百名月をとなりきてとて侍りし我人をも見送る
いとしは

稗の穂にすゝめるけしき哉

蕎もともと年咲て残るうき

めでたくも紀によりて名のも寄る月加生我人

枝稿

男ふりまのむ顔や秋の月

八月四日　ともん我

手取稿

○

従士秋の坊宗匠の坊にしくは伊勢の大黒にて先に網編
京にいまするに竹羽等事にて伝士子須摩八さくらとそえ、
みを乞一すゞの変化草のこととうし一入にあはれしくをねし
六大の法のまさに若のうへ心も静かなりしくひさもしも須磨のまへ
て翔るのうら文に合せしておくりしに是にてきけしてなかめ
安らかなるにすひとなりかし見要ち工夫とてしらひを存じ
やはらの我粗に翔るもなりしかの新てにいはゆ抽き花山花秋公
ともしさて天々痛くある筆に降りて病るる如花にいし名月
さとん句方へあつとの仰けまるとて有りとわしてたらふかへ
手をいとはつゝわりかしは血外に度しはしも迷惑いたしける
春に旅に句日の方をきくへ来るかしまたらりずかりれ

猶〻其角迅速の妙をあらハして又こまかにのべ候てつもり承り
候へハ随分ハ其かたハ節ても所作諸事他鬼生涯のうち
のしかたもしらぬ仕かしひつの所何も〻もむかしく候
あらく申越し

七月十七日　はせを

牧童様

○

ちかごろ深く参候又よりむかしまもく方仙出え候而
去年宗鑑出来し大坂ちらして直ハ枚風所にて[illegible]
や来候文ハ出し候件の牙様まよくはや方一人ハ月見ひ
八式井上林之入志木候一句申し候

[illegible]　や　如　此　[illegible]　て　来　九

去年ひさしく候而以後丈へハ其文かゝやる節ほどに此井八〻其
以是て何かにつけ兼来こそあし成りたる候

卯月廿一日　はせを

去来丈

○

一更句ハ物に見て候はさをまくなく申候てハ八日
此らかさを存候さん何と枚本才記ハ又一人年の門人去来殿
之其のこれ候我の申し候て五百年来の趣り西行の撰集
撰にかなひ候ハ此度ハ[illegible]事是又人々付候ハ
此ハ少しさる二度西上人も思ひ之へしさるやすしく候て事の[illegible]
としてハ八萩かゝりて引付の老後に句すみやとかにはそれ
にくし

卯月廿日　はせを

此筋丈

千川丈

なれ人のこと葉をいましむるもの也

（一）

一極菜底ゝくの句物にて扇引さくらの木師と互しやれ
総手には句としは手は清句は眼くは草くは野担過其般
俊下式俳諧者人の拶拶すへて手より上さる人の茂句に
をぬるすらは手を立てうとしへ花は海の海に句抜殺の眼ハまはは
句ハようらしうふれしおたゞ彼見やものをさらく高人ゟてきまさる不宗
大としてしは山中の蕉ゟは三つ物のすけは最新く是てしは付たやしは
此度く易しく之は物は誤気残もや入て見たくしは才三文字句草

おいてもうつとやしは山中の蕉ハ子か加てわらかハ、才末文草
危地正系能しても同蕉尺らとうやしは拙作新うとて才三句句
め付てきてしハ雲の句作てしめてやしは素ハ西風らとし尾をや針
名手調へすとさけれとも浮世ハ関すもゝ尾せし寺作賀をと先
すて段てし難針ハちとし秋散閉関としてて作をもハすさ々佗さて
浮賀佳す次才ハ次のやしハ跡もてん句条同行ハ理作す
そつ人の秋入てたはゝるて句作せ見ハやすまもかハ二十
六七年のうち来たら寄附し奉情すうしハおまた二人あと三人して
おもしへきし和寄しかしらひき物和尚きさす最後し宗房封分
のなすさへて寄さし歳句ぐへしすわしふれとこのくぬすのとの
まう一句と味すすなくし句此度へ此し且し役な念ハ々評
同行しを秘ハてし十人をしもやかさうりかをえてすまる決定すらの也

るすから入て又こゝ房居の跡ハ万子数年秋の坊句をひ小きぬと
の英雄でも能くゝまつりかへしおける

十月十三日　　　　　　　　　　　　とも哉

小枝挿

○

覚

一　もち米　　　　　一升

一　ささけ豆　　　　一升

一　ゆしれ　　　　　五合

右之三分の形合子ぬふりに宮にいらそ侍吉におもせいこし
のぢ茶八一葉三升ちかう深山すかひやにを飛ともよし
いせちら入るり

十八日

其八格　　　　　　　　　　　　　とも哉

○

山陰月桂雲門餅

屋後松蕉趙州茶

俳諧ハ障子おひらくるの外松

火ともふくる手しるひすの部

此らそまし俳諧の変化を知てしと詠たり吉人もきはめしは
又格並るあへて房ぬ楚情に蕉子吹ぬ俳諧浙外すくめぐ
そのてはしさして

春　深や寛と　ゆきる都のひぢ　　房

ゆきる枕のしくさよぬ月をうけちん

十六日
浪化様　　桃青

○此比ハ俳諧の本ニ人々も手をつけ候て宗匠ニ上
りてしは世の人の目より大事にかけ申候へどもかへりてよく侍し
者候ふへしと存候

廿二
仁右衛門様　　そち代

○貴意ニ四条そろへり(?)候　某殿
御状忝拝見仕候侘住の仕合しらるゝ事ニ(?)候へ共御心
とのへさまさし　追付参上

きもん(?)へ様　　桃青

○又うえん小松の中山御くらを
昨日ハ浅野(?)深山ニ逢候而被下候其外悦(?)申候一言俳の
むかし剥(?)其の先棒ニ被(?)因入申候て四五枚相待
候へば人々ニ申し進じ候

七
杉風丈　　そち代

○二白俳諧ハ枕を以て先を取(?)筆をもつて新しみを尽し候人ハ少く俳諧
肝要なる事ニ候白老ハ深山なる気心持にて候人ハ少くれ候

まのまし候

一番の字ニ而書ハむこし候更ニ八代筆ニ而くしく手も老語ニ

下り入て増上升の用可申

十七日

晩ニ極　ちと紙

○

傘ニ張候新もとめ候ハ家張不存候故帳面へ申付候而は

おやすミニ而紙をそへ候て貴殿宛ニ候様の加筆宛ニ候

七日

三頭ニ極　ちと紙

○

新麦一升弟ニ而候師のやう風流五升ニ八百粥の御法ニ参度

新一年ゆき候二百文不存候

御油ふくく新や盆の月

○

松屏風あ事も残し置き候て御渡し可申候手本へ

物おくれ候や白みなし

松風ニ極　ちと紙

おくれ候極

口上手から不申しうち大根

○

口上

此方ら状ヲ被遣候通勤宗徳古風被候御足不思議御用是非

三人より一物ニ御加候さよし一両余中ニ而ゆきの候良宗

京都上洛候節は小栗梅丈歌仙七千に賀見すゝ詩仙堂に
東ノ通りにおもしろく候て醍醐山大守様出門申候しお斎を
申上候處御案内

卅四　素堂先生　芭蕉庵

○

されども風雅有之武府御半ばかれ候
御半のおもしろく重くいたし候へは
二轉之御芳情旅店へ一ト通り御座候處未得御意候
きのふの掃除ま未一寺の細くも掃きのふの掃除閑五月と
重ねてもさめく折節にも御言候是前程五月の末のへ也
向後も御はに愛申べく候少入来所仰候

○

廿三

支考文　はせを

草枕月をかさねて露命恙なく今年は仲春の末より伊勢へ参宮
尾張熱田に足をとゞめ宮地の人家々遊て名古屋大山頭の為に
東むすびの月をかさね伊賀の山里に春をむかへて梅の匂ひを和して
世の中いかにといひやらんと其の後旅をして泊りをかさね
きのふかきりの秋にあらぬ其の後、江戸の外に先一簡敷机君空
梅やさくらの春ねむるふところの外

四月五日　はせを

其角雅生

○

梅か香やむかしの一字あはれなり

一年草のことくにして和銀なき亦飾のたてと仰なる

やるそのうちは

二月十二日　梅丸先人

武陵芭蕉

○

ほとゝきす声横たふや水の上

一声の江に横たふや杜宇

水光接天白露横江こそ横たふの字句眼なるへし二の句

いつれや捨かたきとゆへに紀念に水添沾徳に云その句

未た決定のなかりしかれは両句を沾徳に横

江の句文に叙して声よみは白露をいとしかくされとも

江の字ぬきし水の上とかへけるは句のおのつからすまふしき方

思ひ出へきの余光もしとのくすゝ内よ山口素堂京安適亦

と語る句のうちにあのとも表そての上の声よろしくさ

さまかはりし事も此ぬきたるも見れたる句のよし白露横江より

奇文を味合て絶ての也

荊口文

ちよう

○

おもしろき寛に家家に隣たり無き女角も一句をもしとて京武

陰もはかりて文路を一合にて一年より余文字能

のかたを合ならしむことに来年ともも入てしる

去年九月

ちよう

芦柿今ち人

ありし野にこの月とみけりけん

しら露もこぼさぬ萩のうねりかな

すゝ庵や二筋さして萩の花　其角

○

追而申入候めづらしき手紙、過日中ハ清学の御つとめ候御宗
ト申短冊にはさみ申候事へつかはし候二三枚でうつ候め
やかれん～ふ当井尺寺しく申手紙ハむ早く候ハ
此あひしつきみ御何分でもんさく候を知らりて狼ず申
よは委細手紙ハ尽ず候ハ人を来ハ申候ハ
こゝも申候葉飯に添ん事のまれ
以此くゑもし候て以上なし又其ら早々以申候て早々以上

すぐれ以上

廿二日　　ちと代

年月文

○

追而申入候、当所ハ春の町、松しみ御所の花盛りにて見物
風斗存候よ御出可被下候
茶の家も住居の世をしらずの家
御くまや名所魚此月ハ流
此あるべしとさし候て道行にかゝる候にして以御人々のこと
相良ハ欲みて存候茶屋寄ス

卯月廿六日　　ちと代

風流文

○

外ゟふらくかか　翁ゟ　自兄への文

存ゝ候やう雲くに書つくしさして見しゝ所々の句よ

出来不申候まゝ此句をも存し候にも申されまし〳〵真に

ええ清語に気ゟ事月末に詠申候所存で御座候

きつ放ちて給りの誠に旅居なかしう文なし

十八日

如行丈

桃青

○

只今思ひ出候得者二三人来て候も野庵へ参しさふらく候

めくめんはしまし候らめん八ほ山を以て酒二升つこし参入

はさう候八清水納豆茶碗に入まいらせ候給新年して次

手引合をなしちやしつけむ候入れ

二日

かふしや蕉翁

去来

○

保生佐太夫之所にて

むかしの名はさまゝにして男才

お将尼の家は餘情にて

素堂か菊園に遊ひて

菊の香や庭にきれたる沓の底

邪彼うらもの処にて

金屏の松は古さよ冬こもり

於広く代兄うぬすまして追日候得罷て一両日以其ゆゑ

當年ハお手本多く出来候て既に仕立中々かくれ候
き江戸表手本の手本も少く候へ共当方にてハ五百枚も取
手脚の纔を揃へ候ハ此節の纔手も致し候へハ何分紙
くやしく可有之候何分にも久々に頼上候紙屋へ一通り申遣候
まし大坂大坂にてハいまだ紙本も高く候へ共文字の事
候ハ何とかし候て彼是出来申度当年ハ格別よろしく候へハ
上方迄のものハ銭にて相渡し候て手すき候お出入は度々相揃
大きに残り候分ハ近々にお屏風入用にてお尋ね申上候
五貫斗の小豆ももやけにて下直にて皆様一通りよし申ても
宜しく候て御使にお渡し可申候左様御承知被下候
かしく

十月九日

ちよ代

○

雙六絵文

追々寒く成候處御揃被成御機嫌よく被遊御座候由目出度存候
扨此度ハ少々かゝり候へ共九重つゝみ遣し候
又雙六并ニ手紙も添へ差上候間御笑納被下候
御子供の衆にも御慰に被遊可被下候右ハ
さる方より此品被下候て一入御悦び奉存候
今年ハ江戸表より上方へ参り候ハ
格別めづらしく候此品之御座候
方々へも差上候て皆々様へ御礼申上候
おもしろく御座候まゝ御遣し被下候

廿三日

ちよ代

秋風丈

題斎白坊

おもふことふくれのけるも手ゆるしき

花のうやさくみなつれつゝ　え線

以上

○

尾しゃ川才より宗年までひとしく文少なからず料理不足

の人々けしき文字をとりつきへすとし

六ヶ

三十里尾張大根のたまし　ふれ　え線

又

菜葉しさめつゝみつて梅もあつらへり

味噌八つ竹くふうりなれぬ

○

自尾州廿五ヶ月の後はしらぬ徒然先とそく才てしめて降るを

の花の渡り来し一笑しいつともなく此信濃路を越二人も

みなよろしくし

今ちるや積雪のすゝきの刈跡し

はるかなる見えぬるより根の白上すりしかゝる高根

とゆかれのしこ

廿日

猿分丈　え線

○

一桃隣めはお鶴と此矣亭に旅雅様にて舎をいのち、ま

かやましくハ秋風ニ洲崎たゝミさる様ニ家をつゝめ候て
申一ッゝ所ハ京都佛法五日付して其ゝ付閑門佛法何ゝ何
先ッ早々出しけるに付而ハ拙者ゝ上り候事
のこし候ふかく御礼申し候事とも静かに合せを致し申
さゝやかなる茶会ゝ所ゝ候ゝ桃青ゝ御誂一ゝ候
一京都ゝ屋ゝ毎の事に御座候
一此方京大坂貧乏ニ手ゝ致しかけ候へども御為を存つかふ
大家ハ致し候ハ
一此度ゝ細工毎ゝ好みせめて被成ゝ候事を存付ゝ其ゝ通
来ゝ見ゝ候事ゝ此のゝ方ゝ御よろしく候ゝ子
自ゝ申述ゝ候
一宗祇ゝ御ゝ人屋ゝてゝ何の御所ゝ宗ゝ当ゝ候ゝ大節

一かうにとかくもし近々ニ参候て申上候

六月三日

桃青

花之人様

○

言語ゝ尽ゝ其ゝ正月当

大津浜ゝ御ゝ出し候ゝ御伽

今年ゝ分ゝのうらゝし八体ゝ申ゝ候ゝ且ゝ候

ようにしてめでたくかしく

去来

出水様

○

猶々此度其人に持せ候事ゝ奉ゝ候ゝ森川許六 ゝ

しかく当月衆に守節並句をまちのし表し寄山崎とてくも
原しむ木曽探まし出せうかの人にて鈴向りし山房叢句ゑらし
月ん すゝ やさう 菊しき 秋も則し
ちよ風寄の付合くらし当座京洛の句を見えうしめうすうくを詠
て鶴すめかられ打添ふをし又あ則し山や後くの花晩
川風や うま 柿 見え うろ ゆめ すさ
職人のてしき裁人れし扇ちとてのおきもりしい流し のう牛
也けのしくらろ風月しやも
十行
加生枯　さう代
○
吉年年まうに有たれ年らし月南光いのやと先祥も稿し

ちか代
一弥らうの和燭叢へおさふかくゝ人ゝ国々ち満足
たし其人前の足将然付合し舟代とらされい手帳の節萬山せ
すなるもの先や趣句坂句ふ出し手帳のおへ三才吹亭の紀念
うれのし打家ちてゝ待ゝ升をそくね
二月廿五日　さう代
弥六雅文
◉
無念至えてのりと真面ちてし上入まてらか内おいくてくるかし
くし押くうりやしさん関子まめる更然すと寸つこゝゝりや山笑
れゝて精ふつよくさ作しろと沙るましくこうつやちしくたを何と
ゑ句も許けら後了年ゝ其ま季高小宵句修ま一句

思ひまして ゆかしき人のうしろ姿を

此間殊に寺町の秋田屋方へ参りて御みせ人参り それは

き摺物も秋田屋の方にて売出しあそばし内に摺りたるとの事にて

摺子にや大評判にて又其摺方は京やの十二枚しまひの

絵まで手本にして摺られ候てもしや摺り候手に入り候はゞ

やの人々にも御たのしみのため御見せなされ候人に相成り候

摺子にもかし候べく候

〇

十三日　手紙文

松風様　二月吉日　桃　吉松

残りを御一人様にて頼みまして真に御勤候御先ぶれ御遊ばしつかはし

一時は私加州金沢にて何事に付御くれ仰付大に合点出来摺り摺り石

をとりよせ候いと売り出し候て大に評判ありて其摺の上に摺り候

其外に風流の摺物にて名物の事に入る其摺上包に御摺り候板

物にて御覧に入れ名所の摺物に行届き候様

〇

考もよき延引に相成り候えども風の便り遣はしなされ度候

これにより候て御手に入り候　様の御

先頃　土産の御礼申し上げ候

〇

そこもと御始め御名のお遣はされ候やうに御由 御頼み人々を

お遣しに御座候て御使の者候て御遣はし候

折しも御見せ候を御覧じ候て御頼み申し上げ候

きる編香かん并半代一朱ニ而請取候へ共、毎度ハ厚情ニ御辭退申候
当年ハ用ニ付度々及申候得共、又年々春ゟ随性上ゟ外作
成とも不善生主要用申候ニ而、前方作外ニ相成候へハ
以拙庵之内ニとめ置候と存候、包丁ハ牛ニ而手ニ而、其分ゟ内ニ南纒露
拙者ニ而、此度竹中木大儀ニ而少々有之候ニ付、何角手拗
申候、随分清眼澄納之事の御事且拙者拙庵ニ於ても寺拗
くれ候大ニ痛申候、旧友風情ニ寄せ候やうにも存候てやうやうし
く生き候、古来月も京之扶持ゟ掛り候ていろしのゝれぬ事とも
任申候、又秋ニ至り候て一通りにみ申候へ共、随分拙者京にて甚境
よりて卯月末迄ニ而八足を一通り申候、猶々又何とそ素読被成候き
よし、漁舟之棒を送りて吹風ニ而候、近編頃而及申候て申候

二月廿二日

芭蕉

○

ぬ経雑作

もしもさり入来にて御辭退のお待申候へ共、随分多く申候
之ハすしく此度茶多く御座候へ共、宜敷御辭退ニて
御座候之御事ニ而御座候而、何分ニ而も御取斗可申候ニ而、ひの御出之
之導主とも御待申候而、随分御代々様も先ハ此度御情ニ
御座候、様々扱様ニ而も御座候ニ而、扨々いよいよ風俗致
し候へともいよいよ為御存知ニ而、さてくのことくにて御座候へとも
風俗之御儀ニ而致し候て御宗命ニ而はくの御事も御座候
から御座候ニ而使ニ而も御待申候ニ而参上可申候、かしこ
前々御事ニ而も御座候、又御左右之儀申上候て御座候
御出ニ而も御座候段宜敷御頼申上候

一 [illegible]
[illegible]
[illegible]
二 [illegible]

寅霜月廿四日

寂照居士　芭蕉

○ [illegible]

[illegible] みな [illegible]
[illegible]
十一月二日

洞水丈　はせを

○ [illegible]

[illegible]
網代民部子息へ申まいらせ候

梅のあかり行やら木は梅の花

旅枝はしら成ぬ我中へ入りきし声来るあはれ　　[illegible]

廿一日　　桃青

左梅夫

○

宗匠流と申傳へる亡き[illegible]申して遊ぶ[illegible]

けさそ先達の我申して[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十一日

小向宗竹記

○

[illegible]

一
[illegible]

やうしなりに元日ひそみ給ひ用事のとまりて後千里ハいよいよもし
いそ谷様御人の新年もしめでの中にて宗匠殿へ申入候　以上

二月十五日　芭蕉

荷兮雅丈

○

一当月十六日加茂ノ祭ニ京中ニ一昨日一統源之丞殿ニ而夜
中ハ俵の年ノ入ハ入てされとも四年ハ家方へ申上候ニて
耳ともきこゆ所ハはねてしふうき様子のしく/\のくらし
なり候ハしらす新俵いたし候事く源之丞古殿
もありて候ニ申上候
十六日ハ雨天ニと申候やくしは申しは宗へ一面ニしくし一両日中ニ
ても此度様子ハとくら御座候ゆへ申上候よし候

門の松ちり候ハヽ重而ゟ申上候　以上
二三日ハ又御逢可被成候　御志忝存候御序ニ御礼申上候

壬五月廿一日　とき候

杉之様

○

其後其元ゟ手の書状相届しく存候とく難有存候
御前ニも御機嫌よく御座候よし承り一入目出度存候
手紙なと萬事ハ仕廻ニ候ハヽ其元の様子も承り度存候
庵主の事よ様子くは人相成り申候て事に候
何事もしかるへくしの世界一にて堅固ニ御座候
然るハ其元のいひてぞ御頼み申上候
いかさま其元申候へ共よろしく奉頼候

六月八日　　　　桃青

猿雖様

○

去し比は五日付之文にて申下し候先大坂へ出候て何もかも
御無沙汰申候

扨も七月十七日の御状到来忝存候遠方より
久々伊賀へ返答疎略にも致候、無沙汰ながら其許も当月
の勤め御家内無事の由承悦候、猶々おさめ致候当月
中も成程御座候て余所へ出候へば、是より尾張方へ細
道をとれば是より入

一　枝先生八年ぶりにて長の夜をも暮し候秋もふかく須磨の浦の波も
つれなく候へば秋もさし過候て当月も拾を見舞申候もの

先達て申つくし候事は付合申候随分風雅大坂にて相勤申候
八日に伊賀を立て重陽の南都を見て大坂へ出候て
半夜、猿沢の池に足をとめ候て名月を伊賀の人々共に見候八年ぶりに
て其の月は

菊の香やならには古き仏達

菊の香やならは幾代の男ぶり

びいと啼く尻声悲し夜の鹿

いづれも句作候て伊賀の衆へも申つかはし候得ども此元へ遣し候へば句を
この所の月はおもしろき様に候て此元へ参り候て大坂へ参り候て酒店
にて稲妻や十三日の夜伊丹へ参り候て夜も更て一
寸の所もなく候てひとへに此元の衆中と一夜
下しみ申候上方辺へ出候て候へども是まで此元にて候

手柄を尽してかの八桃隣をの恩志まへをもわすれまじく候かし
折ゝへくれ桃隣桃林縁にむかひて出沙汰らんと急ぎ侍りし

九月十日

秋風様　はせを

○

過つし入て手紙今も来年こそん紫陽のまゝ待る中山に一つ
何さくしくいとし後て大せらぬ代の通ひえてふのし入て名古佐賀藤郎、
ぬきしんかへ色そもよろしく教文て肉包ゝせはらしくてもよく
入て候ふ一句

物申しや紫みうちみ月と也

いのて思し入れ事古今をれ紙てかへしくりさるを
まして了なのしめ

廿三日

秋風丈　はせを

○

三月十九日伊賀上野を出て三十四日京の滞て百三十里此内舟
十三里駕籠四十里歩行路七十里雨にふらるゝ日十四日
瀧の数七ツ　龍門　西河　蜻螐　布留　布引　箕面
古塚十三　並松塚　素盞塚　乙女塚　清盛石塚　忠度塚
敦盛塚　人麿塚　通盛塚　松風村雨塚
越中前司盛俊塚　河原太郎兄弟塚　良将楠塚
能因法師塚
峠六ツ　琴引　臍峠　たうの峯　東ノ岩や峠　小仏峠　櫻尾峠
坂七ツ　猿坂　西ノ上ちいら坂　まくら坂　宇治坂　かうの坂

不動坂　生田小野坂
山峰より　玉尺山　安祥嶽　高野山　ありつゝの峰
待尾寺山　金剛寺山
此外様の数川の数名もしらぬ山しへをまかりしに
卯月廿五日　万菊
惣七様　桃青

○

嵯峨へ一見の御出なされ候もや頃日へと旅あそしに御かへ候
よりも会付承候
其許くれ風流しも候さてしも相待事候宗匠よ存候上
京にまぐしたまたちのはかまてなし先し大塚の新物重く

の手柄とも存し　此元あり候て事はなかくやし候　時分来木下あきさ
み候し見し宗匠のまて語りし大井川の舟遊にも候なきへ伝申候
拯常なる山の御さまの議めくし候し百里にのるへし
五月廿日　桃青
直也様

○

一候らまらし当年八拾貫斗の目候しの骨折有何候にかれとも
有らに世よ見れまらは語りは二人のものもしし十方をもしまらは
ころ(?)さ入ますは西の南光れとす候らの不越了ならてまし
一西の宗光茶の湯切ちさ竹郎権雜事
一宗派宗祇の妙情ふうもむの人々し御上へのれ不節の事もしるすよ
なし

一　手紙高起ニ見え生臨ニ八魏つゝし
一　桃隣ニ中ニ再会ノ折この比カ蕉ニ孫杉風子調八華子蕎少年け
ゟけ兎も角も一日意ゝしと一つ有り
元禄七年十月
一　支考此度翁御霊深切寄せられ此度新たなる花の俤
八則も寄せ候ふべきもしは
文考ニお伴の後の字翁より命卿の色さゝ翁字都て
殊勝ならむ杉の元をとゝめしとて
ともに誌
○
遺物完
一　三日月日記
伝受ニ有

一　翁自書本　同所
一　埋木　半残方ニ有
一　新式書入
是ハ杉風ニ有しを翁筆のまゝ本写して一つは支考に支考より
てゝ写し
一　文章反古
右ハ杉風方ニ有しを文章之草稿ハ支考ニて翁悉く捨ル
ともに誌
○
一　翁附岸本として翁自筆俳諧集ニ於入ル公羽と翁より送られし
このまゝに杉風より新に入る
一　藤篇のうち所持の句引立し

一古今の序傳百人一首稱せ抄是ハ文字八の外に越て

元禄七年十月日　くを述ぶ

〇

浄先にまて其跡念ニすら廻アりめの我と又文字の俊さら外浄年ニ我宗ニ入部ニニ路跡一の外ニて五中上すの布ニし布ニ家ニ決なみの歳元字先を浄しめ子跡の入功を新中ニ十年の成生乃度存し通ニ八て浄むすしカ若しのし日

十月十日　松尾桃青様

新蔵八僕ニ筆を折ニ示ニ　桃青

俳諧一葉集句合評文部

古学庵佛兮　編
幻窓湖中
坎窩久臧　校

小云浄ひろ竹の枝そしし文米小集ニすの何をく[illegible]
とら紫のひく人とは字を称とし[illegible]以粉ゑとし身を
路日め在と存すらの[illegible]浄れのさらるハしめ手かさく小江
こゑううふふみしら本字日於き人さとらし[illegible]浄濁まいを記し
とニ十年此歳る合を紙文以右刀打紙の式他浄ととへの於
秀者ニ年中し八ちらしされハ事被存き人とまれ功ふ江分を
貝功浄ひしい山めつハ合そて枝原ゑを大てすのたれハし又作君於

姿の句をも勝負宣めるは雲に座ハしく称せし山八小らそとも
こゝさら家の餘をもてくらし天のみの神を以て宝前に
奉りし神のみやしろの身すみけくさしとなしぬ

寛文十二年正月廿五日伊賀上野松尾氏宗房

釣月軒にしてみづから序す

貝おほひ　三十番俳諧合

松尾氏宗房撰

一番

左勝

みほひひかるゝ色や伽羅ふくしよふひ袖　三木

右

春の家やふくむやすらひろきん　我正

左の句は匂ひを出て伽羅ふくしのうらんけはれりと見つる
覚侍る　右も文書の家は嫡々大きにこそかまへしと大
学の家ときこえたれども一家三十年まへは柳首ひはし侍
れど、ためにも侍りて猶左を為勝

二番

左勝　　此男子

紅梅はほのかやほのいろそめてゐる

右　　蛇足

見分て梅そのものや次休して

左の赤いろそめてゐるは大坂でやる丸の芸であるしてよく小寄
ひけれはわるくて　右梅を見分てよそのも次桜はむしろのにたへ
年をまして竹にも似かよひて梅の景色とみたる花桜の芸
句とのの作は今で珍しくされて質は宜しきもののひとつ耳にも
とのくなりのいろ彼は趣向もよきかお彼もよくいふれは右の宜しき
やうなけれは左は見男ひとよりて左を以為勝

三番

左

なくなるやけふも御殿のはしりのもの　　稲節

右勝

数年もまむかふ見ればすみれやお竹かな　　哉也

た御殿の格をかきよせのしかくも見ゐるのはしつこきされ
さくいけよくさえつきさらにくしなれとも左のおもしみかへし
数年まではいふまでて家の蔵とも深くいくかして能も見き
百姓の納米のくさみをも家よめくも虫のかけともあしよかれん

四番

左　　佐余母

きのふ猫は今年の麦をたべなさるや

右勝　　和正

麦なつれおもしろいや猫からさんけ

様子まさしめして見つけまする右の句詠ふしきかなとこゝちよし
さる八ことは春の花とうるさしいふ之へりなれはきのとくとくてこ花さのし
いろめつきあるさは八分ハ難しれまてきのとくへにはてる
右まて梅のらしきれしと小寺もつ月之を気合されたる八分位似
きやきんへかしらやこのは相木のいふ一へねつしとおもしろくて似
さらこ又源氏の雲を木下のすかたけ子尺にいつまて梅の門跡
のせひ花をみけまて右の句さしたる新しなけれとハ朽様

五番

左 持

月るみ葉ふくこそけふ雲若され　貞而

右

消ぬる雲や花めしかんとんさ　一友

右の句雲若やかてそけし作めてさへうはなくとろうこんうね去
子作ハらさつろかされさらしる六六言の仔ろへしたし山のうけそへ
引出されたる生たるかへんらけげる珍事子実付る
右の句をまたゑらけしかしさしはるる八字は後のうらうさなうすく
見まてしるれの蕃おまのた尺く付れるて一見とんへる作意も
をとのしくまてあらうこそあめしてあそへるいるておもきこあぬ

六番

左 勝

きやんかに露は玉子まゝ見へうし　太梅

右　正之

尺子ゆのんとりと山家のやまさくら　吉見

右の句作露の玉子見へと人一句とやまししくをさらるてむりくと

むく犬の尾よりちさき花見ぬさま左のうたさまとして評のごとく
みたるにこそ山吹のいと古株とも申べき歌なれハ左の
惣て我の左勝ち持ハ作者のちから乳けん

七番

左　持　篁尼

たどりしかんかり余寒ハいさ桜

右　代条母

きのふけふなれてきれそ江戸桜

左歌の句ハ先右部にもよくいひての事とおほかれて此事
ものゝ見えしめでたかる事おほかれハなるべし
右歌こそおもひ入の深き事なれともいひて春風をなれ事
作の見えれし八句をも情むかふくいつまても持とくなる家持き

八番

左勝　珊之

しらつゆや咲残りたる菊の花

右　指季子

残るらハやまのおくさへわけ入ても
左ハ山吹の名香を見いだされ咲残る萩の花の作意けり
みやびならず有り
右の句花の残るをおもひてこそ定まるとしいて日まいかならぬ事
作ぶれ残るをまうし見すぐの思ひ候て此由まても浮世
五十年一寸しまさのひぬ花の枝咲すしの時まきなれハ見
同の題の吹残るなる事へ去りきまゝれ仍左を勝

九番

左勝

鐘つきつうやちらし花のえさ　露節

右

きてもみよ甚べが羽折花ころも　宗房

左花の枝をちらされしとは失ふる跡元ハ誰似候の歌くらしもいとゞ見るにまさる右の甚べが羽折ハきこし尺かさ余折りやとえんにこれより一句は伝えもこゝろく深もそくて花の色もよろしふ見て侍るハ見るものすてゝまゆへ上左の鐘のさうまそ深きしられハ甚べが伊さらもかちまけなくて左はうち侍りぬ

十番

左持

噂しさゝみかはんつゝみの雪哉哉　政定

右

ゆかしきや山の尾花ハ手まくら哉　和久

左ハ日本三景の春花の姻もそのひらく白の波ハ手紙のとうなりもよく見し侍るに右の句ハ松にむさしれぬつねの歌とせずんしゝやれ常これよえんひけうんのみてしるふ少たらすれハお花のまやく持ろくていまみかちまけをとさゝめ侍るめれこゝろきくとれぬ翁え手めり

十一番

左勝

時鳥答へのう峰ーふこんえもとさん　吉之

右

ゑくるゝは玉子どやしかまやほとゝぎすに　一意

たゝきゆりの声ほとおもひくどくて籠の中の情れ猶

も尽るまよりも勝なき

右の句其のかひらの中の材るとさんをつくし郭のふし

をゆるさぬ蟹者手尺にされハ玉子どやしれたやさしくつよ

小家をとりかゝりし待る伴敷のむかしもうとさしかれハおもむ句

よいさんに翁ありくりれとたの人言ふ味ふへてハちいさ

らさしくいひかされ　大抵ハひられ待つき

十二番

左　勝

小六寸の木さしや菖蒲かれの身　義子

右

菖蒲刀中や桜の木ははつけつゝ　雲圻

られさる佳へ小六方と浮ぶみだいゝるでつちハるゝしに

らんでんゆるぞんゆるぞ

右の刀ハ源五郎和とくの長短尺のさ布ハ三文下紙ハ二文志

めて五文の繋うし手ひのやすものゝようし待る右の六寸ハ

いらさる戸口右を菖蒲刀れよさも木すのうし待れハ桜の

木れはつ削ろ左刀サも及ぶへからず

十三番

左

竹やり火ふつゝおれて本意なき娘かな　適意

右　勝

ふきつくれさえんはかみ牧き引　義正

たのむ木綿にむすめとんふすつくきよさよしえを錦しる
てまをとへ一句の立すくるまさ有らしく山家のまのとも
尺くわれし

右の句あたんえしさえふりをて紫をとちふれさるれ
かやの木よくさせひよろぶれさら手上木綿のむすめるふ
まつくれくされもむら火つうんをむ何のしかれハ右
右の半秋のいくつうえまさら侍ふんとし

十四番

左　持

かくしやれ小蓑あふきの織ともの絵　勝之

右

扇もやおろし風の吹てきぬ　村入

左ハ加の郎の印の織まゝとこあし織きあめのはまも庭はさき
蓑振し
右の句おりいうんそう吹てきるてしえ小蓑扇ハいはけすふれ
されハ何まさのうくハかしころはやしこふうしの寸へハかうてらん
ひよんのうし撫かけを定めあてのしハ模陵のきをとくあさぬ扇
のかまあとむくの紫本織のみうちむ骨とも之くれハ扇角力
ぬかちりまけれくおろ物さらとあし侍る

十五番

左　持

すまれこしは月やいつよ此おもしろい　貞好

右

はつ秋さらしや此宵みか月のうけ　　指盞子

右ハいとよろしくふみを侍るところ左をれたらハすゝしくれの
阿ミ月とてわたる心しつかにうつされしろハ
也ともさして盆ハ踊の拍子と見えたるや此さいろしめ刀と納ゑ
んてこそ比見えハさや月のきんたる宵侍るやうにと沙汰し定め
すかてくそらう

十六番

左　勝

月の舟やら宵ハどこらわたしかや　　作秀女

右

月の宮寄よいしなんどぞ入れ　　三竿

左の句ハ浮の心の妻宿むしや寺々わたりよる月を八陰法の
心ゆるしくひろく月の光をてらしつゝ光明遍照十方世界

のよ人中とん此岩句をや上へ出
右もまたよろしけれどもちとたらぬかハそれとも
左ハや自他の殊勝と侍るてうる句に見えかねし更に
踊のかまへん八精異の物てなまる今のおもしろかし
罪のさしてきこしひくるくさけありつゝ情ぞ抹香くさく
雖面つくる拙句しで以左為勝

十七番

左

ちよみし条さうろやかれも弱むく　　吉之

右　勝

むらふ駒ミ足をとそめしやめんてめん　　雫軒

左伊勢ハお玉ハ御かみつてこそよしとて少条なれハかれを条

さりとハてあまりにふかくし
ぬらんとのみ見ゆる処はいかにも尤に聞ゆれども
人をひくにはいふひとしやうし右の句はよし付句の
しれや家をさしかかるはちとかんじたるらし事のよしを付れ
ハおもしろきのはしぎよしと八歩くりてのかれし

十八番

左　勝

けの上を大だんずらん稲の朱　適意

右

かぶりけるも稲のおのしらぬ京女蘢　城次

右の句は大かたなしことに稲の本をゆひすくされしそのちかく
ことにおもしろくかつ集めて稲のこころふかく白能きこえてもの也よ

すなわし
又右の京女郎はむのしハあれどもまたおさなく見えて字ぬ
おかしきと稲のよのをおもはれハ系書あるすべぬぬのかぬくと
先はさきなハましおくて田のひろさをえハそのよくそしたり
おかしきことめ田

十九番

左　持

それ鼻ももちてくんのむ新酒かな　此男子

右

うんのめしはなくのうゆる新酒それ　哉也

右の新酒味ひのよきことをきわめてうけたる鼻息をもって
とんのむ新酒ハかつしそ後はつけのさ白能し

右の句是のみとえとはいへと一入寒しかりむめやゆゑとてよろしう
れしより風俗のよしハさしつかへ実かすくもしらぬ書かれハ
よしや毒ふうれしくていふへき勝すけをもえさしめ
作るめを扱ふもひとつ手にてや

二十番

左　勝

鼻毛としらしるや小野か手鉄炮　　政群

右

女丈夫や毛抜もつ指ふさ毛むしり　　宗房

右の句は小町とありて毛をしたつけられ給ふ八九の毛のあれ
またひのきは是の拗作りも小町か鼻のけしきをまつ下作り
しようむよくよう合されさるもくし手上物のさてよへあり

よろしくあら事ぶれてこゝに鉄炮のすいかにとくちぎれてこゝに玉の句
ともえかれハ火縄のひぞんをも申へくやうしかし
右の女丈夫あしく論てもあんも毛むしりしまれハ如何なれ
き首尾何しそやとみのみに作りぬ

二十一番

左

作男鼻の妻の毛ゆるし藤の花　　鼻毛

右　勝

みつ荻やかつりたる手もと長さかんの毛　　不口

右荻を妻の毛とみてさて抄のしくさもひあられ作れた
ころ荻の作そけるも長さにこゝろをして殊さて心のわくさ
作りて尺くくおうちかハ句や一句もすうてさて是のしく
かれ

今より左の発句へとまさりしと聞りさ大いなれ物とや
いさん

二十二番

左 勝

はやけさくゝ右のまなりけ紅葉かな　　三木

右

もみぢぬも赤し尺ほとのしほ枝の松　　政足

左の句紅葉のきめしの作意し
右の句よくいひけれども始めにまちがふしをあかし
蔭風れて物すゝろそゝ舟よりぬ人なくし右の法めく
右のまゐ赤く手をハいろと人色を又まして紅葉のなかも
大むすてとも浪万里ふたりひはれハつるめてしらく打合

をまてみえしほ木乃あるハ一本さへけくのあれく

二十三番

左 勝

しけりてやあやめのうけ花ある小み雨　　餘淋

右

きくつかしやさくさやうし窓と筐　　政当

左のあやめのうけ花ハ佐川とりものし志れもの猶よしられの
通りものとや申さん
右の句さくさやうしあんしゆんさまとさハいつさも
しやあんハさぞといへりけしまたしかとてもめれよふう
なかれる志くれハいやハ哭なふこの雨を志川れしめれ
うけ花をと偽のかちとや定めむ

二十四番

左　持

海の礒やすちてもち甲みまゝ足　　餘淋

右

かゝ阿の代のちんどりも足をみせん　　三竿

左の海の礒ハ十?にも一筆こそさとらして足ましハよろしく
弱く作れども一句しまりて見ゆるハ?れて?の?ぬてゝ
男ハすけれども?ハおもしろく作りて右のちんどり足こそ
とゝまりけりしかし阿ハ??の事をふしところ?????の枝
葉もちの??をもすゝれて背くみ??く足の??骨
もたくましうれハ仕立のちからも??しまていゝるとゝまる
みゆしきれてまけれハお持

二十五番

左

志やくてらたしかしめしのハみそく飛ひ　　阜允

右　勝

くゝれ酒え本のじやとおかしめを　　一入

左の句さそしてとゝ句やかふめしいくれしハとられの?て何とぞ
えしいかてゝおもしろくて句やかふめて丸ハ?来?しや
とゝ?字をとられ酒?作も?るハ桶の底?流くしい
?られ樽のかしこしもあく?句なれハかん??の?さめとし
?作かちのうちとさへめぬされとおきてひとつるそ耳
??月もちかし甲のみ?れ酒のしらみ?ていさかやさん
?ゆしる?そ?ときさのこ?句作分さまる

二十六番

左　持　　勝之

ことなりてかんかうめけるおもかけ

右　　珠次

こゝろさむくおのか宿の月のかけ

右のうたおのはしハかんかうめくことに京のなをとゝむる

くじかことかれハおのゝく詞のし月に住きつゝ

てらふ哀くし

此又旅宿題のそこにさんとて云をあつとちねハされなる

そげなくいひ月前のひかけさらにそもやすへかれハ持

おけのきいかなるをさめんすのおそろかさくのおもかへらぬ

侍るに聞ゆ殊むつてまくさまおなりんでとりて持とき

このきの人のそしりをゝもふかりけるのちにきれやすめられん

すみさえんぬる哉

二十七番

左　　正之

紙に帆布か松の緑さんの空のけふ

右　勝　　義正

降しきる雪やしろき雪ふじ山

左のうたと紙帆布に尺とよれさうたのうたハけやさきか

志うきうれしうさいはのよふにもよくつゝりてやさしくそれ

姓をよふかれとも松のたんさいろの小雪のふしハあわれなり

一白のたくふ紀尺し侍るに

右ハ立しる蔵にふしをも由来をたるれのこともいつくかき

不二の山ハ峰をもち肩をとむかく侍れんと左の猿楽師を安
らかすかけまゐらする八まことよきねかかつるのや侍らん

二十八番

左 持

炭の花や付もうつしいこんぶる 小蒼蚪 吉勝

右

炭のしうらみやずんといや氷床しや 甚勝

左炭をとうつすとうけるもるハけふらるし、えんさき
ゆきやれく一句もよくいひえるみのけむされぬ也えし
右の句すんとしやれきと八ゆれとも寺のよくたんへと比
ゆるもなれハをなしけし炭とまさんへしやおはしれ勝屑
ちを振をしやく炭がうの口しいらまて拵くて持と定
ゆるき

二十九番

左 勝

掃除して鉢擊ゆくき引や炭俵かつ 不屋

右

炭焼やみのら先祖ハよく志けき 一入

左炭とり捋しえんとてもよし掃除しまする八まことよあれき
ながらきれて香箱ある炭句し
右八和即さふくおかれみのら先祖ハよく知えしとを不知
炭をみあされさるのむ炭俵をかさふみけて哉へし入侍ぬとも
先祖をしよくえしれぬへのえんきへしくはたの庵らしくん
の称はやすみえて勝と定まる八をとこのしき鄙と渉ふの筋
ゆくんみるのまや諺ふんうし

三十番

左　勝　　　　　　　　　　沙男子

犬の桜やいきらびたやじんの神ごゝろ

右　　　　　　　　　　　　一友

菊気やえしらみの出る神子神子

左の犬の話の句さもしう人伏の石山の子のろわいきらび社
種もうらむ御幣のおやぢさまも御社の宮んぬあやしうひたきらひごころをかきのけるもんの
うたまくおほしくみ侍る
ぬのきうらみ葉をひくへ半ゆのしかてうまなき化気なれハ
まけの上のかけとゝくてしとく息災延命の神ぶゐきとくて
菊のにりのかまゑへとて

松菊栁とうかきみてかしこ狩平俳諧の筆意はいくまじかうの風
情杜子がちやも山谷が香をまたより神くゝ都逃すありてうなり
錦のあの山の花のもし渭水の春れ雲をさひ菊の海の月の
影並江東の雪をさえても蝶子此詩を吟んて農夫に学べ
をたぬをよそう詩か作五十句を作らうするのふつうを候ゆの
菴のをくうり出られもやまつく思ひと名付さるかへし仍
以て我より翁の趣を獲よう新詞萩用る林中をも春て益
逸る翁のはまかへれ来くきく大江の千里八百番の添をも
詩の題をさかしひ近世の女角は俳諧を詩をもの人を絶
千里同様中立てて残知れ来るとしもへ家ぐれて心に名
似よりしれし見そて候をとらまさえをし　さらに

延宝八歳次
庚申仲秋日
花亭江師傳

田舎之句合
第一番
左 勝
霞消て富士をはだかに雪肥たり　ゐなかの農夫
右
菜摘にそし白魚をとりて野川に放しけり　かつしかの野人
左の句ハ青苗の一句と見えて、ゆるさすして長高し。ましてや紫の細雲霞をもやうしてゆかしくも見ゆる不二のけしき、雪肥たりとは余寒も古人春雪痩たりなどいへる、作意おもしろく、右の句菜摘とともに野川に白魚をとりて放ちける一興も、め、しきのやうに野川の流見るやうにおもしろし
第二番

左勝
春の水やうつくしき紙書の手をはなれ　農叟

右　野人
引つゝく菜をたをの手春の弱

岩のをたとへし昔のこゝ水さしくしたまれむかし波の文義之が右まり旅素が自叙帖の冬のそりほうそうし右此句編すべきなれ

第三
左持
柳の根椴ゆのけぶりまきの柳し　農叟

右
春椿蝸蝸流るゝふりぬべし　野人

左右の姿何此句よりもすゝみ侍るかの山谷が烟雨に青たれしかしに黄にナニヌト似まる梅の詩も似より世俗つりいさ優るり文梅千つゝみかいはりをまさすや猶興何りよ也とえいさ文つよしたル左は大和謌を詩をまよして色紙うるり佳景を筆とを抜きして文字をすけうつ

第四
左
肉月米つくも古里やおもふ　農叟

右勝
乞食の家ゝれ自炊窩　野人

ゝ案スルニ乞食の家ゝれ自炊窩琵語子詩ゝたり吟子米つくも古里をしらへ哀涼ふぬるてれ何ゝされてもゝ乞食の自炊窩琵しらの日ハ火のさくて

をとしとハ批言の批ともいへとも

第五ゝ

左 持　　農夫

坡利狂人咲きけりや花なまけり

右　　地人

桜狩そふれ同足みれ志ろくまよ

坡利といはれて花ちらぬやうに狂人深切し又同足ハ苦の

春のさくらになやさし上乗合中の桜をも見盡しまる作

下望の甲乙ハしれけり句逃言差なし

第六ゝ

左　　農夫

住みよいふくらなるくしよふぶる

右 勝　　地人

鳶千余さく春をも送るや白雲や

喚子鳥先手吟ん味まはし代まを書作れハ傍

愛の事俳諧をきんよい世間のし文つゝある季始歌読

千姑獲鳥なり出るとなりにさまよへてしひかしれひそや

貌歌あそくらし且此の句此春を家て世露のやらく

まる道あるをみへとよのしひ称きまつりゆくもの

第七ゝ

左　　農夫

今つきかくて浄瑠璃唄の春すれ

右 勝　　地人

何とな羽織緒綱ハ重し紗ハ輕し

まん滴よく云十竹れしや友羽折まなるは拾られ中庸の中を用ひし志のるくむかし道才言の入る者の関白とすられのきらふまるのされたら仍以友羽織を勝と定はる

第八

左　勝　　　忠丈

涼カレく露破ほとくきれ草の戸

右　　　配人

明き家隣のうそやきうしは

草の庵の花の奈佛先味隣家隣のうそとんもしたれ
あるも隣のしかまねうきのひまる歌くきらへしすれ
とれよ見る心やや隣中きとしけうをそも用ひんのされ
とも隣の毒のなるうたゆるを明るそ守るゆるさた推

可ナラニヤ

第九

左　持　　　忠丈

秋の夜葉手まとうるみとの秋

右　　　配人

楞陀のよ曲種子かる秋ふるゆるめ

秋のよ生る夜ハ綸蘭の冷節をしられ冥靈大椿を論ずるに似たり又楞陀のよ曲子秋やまでしかの二味吹きる飛
此上風しくよみまふやと秋のつくもれハ秀よし丸ハ家ハ花実

第十

左　　　忠丈

いつまでとのとらん

蓼の花や海むらさき袖にきれ痕
右 勝　　　　　　　　也人
何をとまずすゞみやらん五月雨闇
蓼の末のいさむよ頃小えひの名ちのふけしき涼しく
まほけらし水の面ハ川縁の寺の田舎の夕やみに何をきけハ
飛そ鳴かるよんの後るかえひを移へおもんやむねとてハ
為に寄しぬん
第十一
左 持　　　　　　　　君丈
むかしも宮ハ花さく宿を陳ばさく
右　　　　　　　　也人
焚き火に夕の後白しあれしハ

枝に家おけともよまれる岸の松本の緑青くとうつけしく
佳ふるもさるうち又かゆりの松の木に朗く尺つゝ名の後の白
く咲く柳に千れ柳のむらを何そもて又ねらしくてやるやめ
第十二
左　　　　　　　　　かん丈
石の枕に鱸や汲んて今の箕の谷
右 勝　　　　　　　也人
芝物の涼しき岩丈の末をも尺て思ふ
石の枕古今ゆかし岩木の菓谷の野等にそひとつやの公家
とや旦芝肴の丈をきてかのおもの飾石に涼おもし調し
きさのみねつしくひやすき人涼し
第十三

左勝　忠丈

御の字も羽二重ならハ改めなし

右　雅人

葛とふらし髑髏踊る萩の露

羽二重の御の字ハ美人の心にて秋風にふれても他に移る詩の心をおもひ出られてやおかしく髑髏の萩の露もかゝらぬきたなくよそに見ゆるの趣におもはれ覚侍る

第十四番

左持　忠丈

月の出る舟の山市に川武ら

右　雅人

さして柴の戸泊る也ハかし月

公任卿の舟は乗て乗るべしこれハ毛山一九
川武の舟ならぬと叩いて乗るやらんハ左まさ
吉木の板戸をさしみる月ならぬよ見るべくれる
柴の戸みえてさし出難く

第十五番

左持　忠丈

眺め送る函谷や鶏の声を追

右　雅人

男波行はけて沢戸の海

函谷関の鶏は坂城の波楼船守ルらん持すべし

第十六

左　勝

不眼者にきくハ秋の夕暮をも拵よ　素丈

右

秋の心法師ハ仏の霜覚このみ　池人

左の句歌斗法師の霜覚仏斗とつらんとむさとろ宗やまの句頭しろとろ仍て大福山の坊主の和尚にまかせて問ふ答て仏斗の無常を観するに于れ一理を見て以みえ秘のことく思をもつ仍て左の句閉口ス

第十七

左

妬の町妻呼る犬は尤捨ぬり　素丈

右　勝

芋を植て雨を聞く風のやとり哉　池人

左の句果の妬といふんハ古しとし妬の町といふ実あるて康ハ歌しふれとも妻あるといひしハ猶仏のすゑ化有て思ひ似たてるにや又芋の葉すゑ雨をきかんハやさしく添くさひしき佗ひ趣あれとれ是ハ叙思ふ雨の題とき哉秋和月前芭蕉と似たる事を倒する右勝とする下

第十八

左　勝

月の出の栗鼠葡萄かつてみな甘からう　素丈

右

紀路行山々みかんおよし禅哉　池人

嵐をまじへし俤見えてふとく葛の甘露よくつゞけり
左の句ハ作者子か句よ
茶の色や利休か目をしみ山と作出しすこしいさゝか俤の
似たれと右ハ強くゆきを知らん也其外の意味ふかく
作れと甘露の一滴を舌に喜たるあらへし

第十九番

左　紫丈

明る夜松松の露干ましり

右勝　北人

木がらしよ鳴らぬ蝸牛の古き貝

和歌三体秋冬の歌ハ細くかゝひてまじり夜松の雨
見さびしく蝸牛のうつせ貝とさびてされどもかれか角の

上手かそこ人なれ左にしるきまゝあんや

第二十番

左持　のし子

豆蔵のそのふれどもうなるし雪の秋

右　や人

嗅すまるいく秋何しかは夏秋ろく
蓬山のうるひろ秋のまことらなりかなる鴨の啼あり波際
はる秋らろくへしたや為るを見まほしらん絶して遠く無ら

第廿一番

左持　農丈

悦千鶴く一様の新茶香味そのし

右　野人

火燵のしたゝねや京のすき音を枕の上
口切の一句まつのつる緒をかし茶釜を洗ふ庚申
飯の業ハいふから燒助をや又火燵のうしろの置ハ別にて曰
陽氣壮則變為大火燔燒又精氣衰則變蛇といふ是
を以これを思ふ子燈籠の物としらるゝ爪を見るへきまた
たのもし

第二十二

左　持　　　　宗丈

重ねてしる衿にも掛菊のみえきゝれ

右　　　　雅人

重ねよくハこのれも蘇鉄の女なり

右の句ハ衿のしき重ね子風情をもまたし風情なり遠山

かのけしきを尽くすも咲あら衿をかし峰の衿のしるを
身一人人家をはなれて山里のさひしさなりけりたゝひ合
せらるゝ上又重ねの衿て河の流明かゝる衿く寂しく
重ねの段々をさひしからぬ句白し

第二十三

左　勝　　　　宗丈

詩ハゆるみを松江の河豚といふへき

右　　　　松人

鱠そこらに鰹手ふりて重ね鱠

全体の詞きさハよろしいのれるの前後を調みをあけつ
此松江のかたへをえらる句ハ鱠てハふぐ古風ハ鱠鱸を
わしりて河豚をしるゝに又左の鱠鱸をさえて河てうれ

うつくしさへひとり上まさりて周旋すへし

第二十四

左 勝

是ハ家々類味噌　女丈

手たかめのみそは浮世すりを顔至ぬく

右

宗旨家々名物　丹人

一旦推量し諸宗に論を決くる

紫雲の森の水をくし此かれて枯したる寂光の林よ

から詫めてのみそを塗に入て乾坤を包括する浄土安穏を

定用坊と寂しく心の白炭あつめして天狗を従

この体宗旨をとふくするしみむ志深うしへし

諸家の論より当世お好みのみそを売らんとするへし

第二十五

左　農丈

町分に店おみそのけをつくし

右 勝　野人

ふるき手の名盛につくる姿之濃於

店前のゐけを並てたんとと一句をなるし　ならるて手の

何それかとしに是を顕そすへし

棚々齋主桃青漫採毫判

鮹のある木みさくら咲て餅をまみちをゆりそみて
ひとらまて麹の音ことに附今や営野の詠をひとり
其味の深くあるをきれをおもす

枚風子

営野屋に句合

第一番

左 勝

芽ふくや八百屋の軒に芽もし

右

を引も小松か葉はたると春の風

右の芽芽八百屋の軒に梅をゆかしみ営み菜まて神さ
おもしろき興あるは新の葉は小菜すそらて子
日の松を引るへきさめてよく代のさて先八百屋の芽の
かそへしまきゆくまて代る仍以左為勝

第二番

左

くやなりぬ千物の木同とゝもに

右 勝

花よりも松同しとのまみ 紅葉

古千物の本同もまた是にすゝけしおもふらう

同しとのるとみそれなる為なるを付する一札ましにおもひ

句ひかりしく

廿三番

左 持

芹とる翁碧潭にゑんてこゝに見る

右

防風ゆらく吹て 青蘿渺く籠て

碧潭に舟し芹とる翁薄氷をふむことく危ふし防風は

まく吹て青籠の翁初ゝまてちらしや扇のけちの

いつとこのし筆をかきしつゝけるれる古今の照をさくしれハ

陰むさしくと生まるる人きゝくの杖つくなり急成ひ

よら芹をつみそく人をさりけらふるしらへ捨へらつれ翁れ

是此ゆそかくされ作なりまて先生をこゝまのおかりしにて

即とゝぬ

廿四番

左 持

老わらふしておかつましちよろ木こんとうらか

右

保着やくされ 筆雑のちきれより

古めの月くほしおおの軟とし集まるハ多し 是新注お

物それよりこそのすきひつやとやましくぬく又消ちさの

落葉の中より生出るけしきさへ花むらさきしげみかげ
南向きにて日あたりよくおもはる侍る

第五〻

左 持

春のくさばも盛りの瓜木に斧の音

右

芽ぐみし紫をしのぶ花もしんでを
手にかるやかなる田舎の老夫の働くを常に見るは程
あかしく見る面白くもあらねど此の絵にて
ありやまで干化工さてかかる瓜木の下にうつくしむ山里の
かの又芽ぐみ紫生ぬるの似よるをも以ていふこそいふべき
春の来るは趣情多かし

第六〻

左

さくら菊いらふる人みな何をか以さくら

右 勝

千大根よろし葉を 干て おもしろく見る

穂に伸る出さらさらこんもりとしてまた人の目にかれハ鮮
豆腐にあまれるといふへの是一桁の霞の月もよく晴れ初る
おけしきうとおもしろく侍れと千大根のうらやましき千やうな
わざ有るゆゑ人千本ハ一ト分新しき勝にしてよろしき人葉の

第七〻

左

あゆし秋の色洗いあそひ紅葉し

蜷のより栄螺の住らず濁しけり

右　勝

猶浅の千年越れし山は松本の花

むかし蕉の作者さへ此の詞に取まされ候し　且又越れし山の

うちの大木ありとも候し奇し此山なきの雲や山海

路もあり見しかもし　先作なき郷茂莫の野に作りきいつる春

雨も似大樗を称さるのためとて所かれたらうちの大木

又そもそも下し

第十八

左

柳のちりえまて雨まで花と社いへれ岸

右　勝

哉人山桃を蕎は菜紫とし

花柳のうちは落りけかしまて咲てかれる上戸の柳の日ひさしく手の

うちなれと日も詠人のみ知れぬ本国蔵のうち楽りたらぬ

風情優すやさし

第十九

左

夕へうる雨　社鵑空蟬旦

右　勝

春観やさしう八蕉は布かりて

ちのる筋の夕はきいしたをいてんとしや鵑旦とは時

うそ厩あるるさまの無うろし此の作れとも蕉の右あら男

春観すす称能だしかれ

第十

左 持

きり蛬のゆきてなの命かな

右

夕顔やとい落すすものおもみ

我朝国のかしこくに行て蕣さ蘇の二すしを行うき
行りせん夜蕣の日あハられを琴手任にやしふとしいへとも人を
しきて利根に和らしむるの法行り廿上京命不食切れハもら
あともなすいのちおれ蕣種序ありん夫地をゆるしして
蕣衣をとおりまへくの梅法行の中に蕣衣上人ともゆのあへられ丈
五流に入て高くも流し庭にありてハ色貫すきうの手本仂
あろ風情あらあその上おりにおりさらんやしも論をまらくて
しつやかに

第十一

左 持

女よや菊とへつくねすみこそふみける紫

右

山路の坂もせきたけとも及かや

己り紫にかて千もかしふみける菊の末むさき式部か娘かや
わか君へさやの隠わうりやなとおりまへて妻とならりいつもの人
はとあともやふに御しまのらと又山路の坂をもすてあとる
あとしけ人ハあれともて続き風もともよあて八百と条家
とのう下女のよみさらうしとあえへしとやうきつ枝のしく
やうきら衣法よふ

第十二

左 勝

五月雨それとに落の味を了草との池

右

天窓の枝折もさる摘すしハはかりとも

説ちかふ三日句の告ハ座ニ急やはらの色ひきてまかりかの遍照ハ何のたて蕣を笑せしゆゑもなくとあらひをおかし又斉の貞仲かきてひとしきとらしかひ老さて摘を放て是をへしきと眺かれとも只遍照の何をやいうましうう

第十三

左　勝

児て此草木みかろしと来て出

右

新うしむや毛虫かり起らうれの酒々

左草木のかろしと浮くしてやすし左の負ハかり起らうれ計さきり水手いふう見毛虫の新をきらんと無何りきのか降りて趣向をもとめさくみさるやうる覚侍らハ俳耳よや兵をてきこ此歩り取る方ナテやすかりき禾

第十四

左

古さくはやゆうえも人手る大根

右　勝

わか翁の文を陪すの写れとしふての禾家手渇る走るりけゆえも人々すとよめる古手は説ふしためまゆうし三の禾とも　松葉木手並数一日に染と紀白了紀うへの篇む無何り

第十五

左
罌粟のちらり畠中は夜目にもすゝんハ
右　勝
蕉ハ山としらて無縁隣も自然生
罌粟無きて空所に山の墓自然葉顔生の字の用ひ
んも八つてさて只や但自然石自然木ホの類もしかるらし
ましきちも上五文字力強くて一句もつうくわの優るゝ
右勝なるへし

第十六
左　勝
菜種とも見えて梅干の影法ってまぎり
右
乱漬の種尺かや梅干しの青へき変ル

右の五文字先程まて梅干ノ尻しと梅干の精やさしく見越し
加の志大根を食しる若さ此類あくしや梅の句破戒の僧と
いつしかめしも未来梅干しのせかをらけ食熟の若しみかた梅味
嗜みの釜うけまとゐしやと称そろしく唯茶飯方の傍すり
殊勝におもしく侍れ

第十七
左　勝
暮山の雨松茸のすとしくとひろ
右
岩もくき木ころけれ耳すさし
きつとれしくとも蒼山の句すゆれく松茸のすとしくとふる
けしきなり味深し右の句も一作なれすれ

ゆふされは木からしけの耳にやかましく覚ゆる冬の夜さへきこ
えぬし侍らす

第十八番

左　勝

かれくしを蜜柑と金柑の実て曰

右

氷又栗こそ清しといはんとすれハ

秋さし蜜柑金柑の論ハ儒の中に似たる家の中に家とふく
めり数多の中の見え此句におゐて花園を思ひやらんむ趣味を
しる復栗の句ハ栗からし水を清しとおもひしらる心よく言捨し
侍れとも心隠して云ひおほせたるさまを新ふる方とまくへきやうに
左の句を以新ひみふ勝と定ぬ

第十九番

左

秋の夢ハ千鰹のむすひもとかれ

右　勝

えもし来やの人手を瓜のひとりぬる

ひさこうもとの秋の情千鰹の路ひとつゝぬ俳句に聞へける
さらふかれされしも千鰹むくといふ時ハ六月の季に叶ふるを秋
の句に合せんとしいそかれハ又うしろ秋こえる秋の時に冬瓜と
うらなきされさゝひとう詞あらけてゆふむあれはきまりける

第二十番

左　持

尺立新しく遊ふ女

赤荷浪の青毘布 此笠屋のかまくら也

右

山寺の鐘鳴るつやかなし

左の句頃夷松茶の哉かうに毘布とし此笠屋を露すとしかね
嘶すつの傍へしらを此白浪の音 此さひしきまたによきかなる
さらひ又しもすらひむかる意深し 右の句ハ鐘鳴すゆくにお山寺
の風ちらしらす寺の鐘音を聞くのつれハ面白おもし
さしおほぬ

第二十一

左 勝

木からしや風干紫れともとう河てきし

右

霧やハ巻子干 生所ハ埋木

支川の行路の浮し紫くへ風の音来てやしすゝきやと茶屋の
関の山おもひやられさまし 生所の埋木花咲へしとも
おもしろし

第二十二

左 勝

そうしや松浦の花に紫も白帆かな

右

ゆけかのや霧すうふるにゆくれかる

ゆうらむのみとうるハしく蓮の花紫の色をやうかへても
此川しら洲すつの白帆うちかる白鷺の花女の見えさるも敵
又霧こいすさらむかふるの姿はしおもしろくゆうさるゝこし
松浦の花にかくへて都ならぬめのしられ

第二十三

左　勝

数よしふすのて性をもをさめて物やあそふ

右

水茄のとしかんてんのかんハさくいとよし

数ハ性ヲ註シカンテンハ文字ヲトク増補献立抄ニ曰ク数ハ風味ノ切以酒煮以油煎則味愈厚シトアリ此方賞翫タルヘシ

第二十四

左　持

大根生て逆なるをうしいかん人し

右

雪の菜男繊活して来たり春体

雪の日惜みて庭の竹にかけたる大根こやなしのかしし

雪の中は田園之径をしるしたる竹又珍重

第二十五

左　持

雪の竹子今ハ墻しるさかりゆるは

右

朧月は青柚糸肴となりてよふ

昔の君宗雪の中の沢田河ハ君わさやかなるにしのし九ハやさ

朧月の青柚を沢田河の変の雪をかさしいよいよさを春村れ

ホてりちれ

評浮よう観すいるかし四百余年詞人才子文記こそかなしいへしも風流代々ぞ絶ゆるまし飛訪手こそ

変し内てに新しき今にしてに古き翁の移りかはりを集る二十歌仙
此句合とおもひさまを猶そふさしに白らたるをの代歌
しく天ふる幽かなる思ひふ千言なる是をし今の風俳といふへし
且これわけてや作る人此集を見る人みちを続して代をなすへし此
名のよくし倩がう因次因時のけしきをしれもまたさは思ひの外の
事多ふ八麒麟をつけて是を犬と八を風の卯八騒ひらつて
雲の中 此集八ね二月の西瓜乾解の梨人参みとうわり深く
尾のかゝりしの紅葉もまた此江戸つくし浅ぎひ風もかく
きひ乃思をおもしろさます雨太生なあらしこゝろさねく高無
此俳を京好そくしかいちうの草の二葉なる松茸は身をいるゝ秋
析つて其の絶の香る奏しをれしさゝけのつく長く
流れくる八そしらやまみんとかへて今此時をこそ念しめ

かもめ瓜

于時延寳八庚申季秋日　華桃園

続の原

四季之句合

判者四人

春　素堂

夏　調和

秋　湖春

冬　桃青

撰者

不卜

才丸

其角

一番

左　持　蕣

蕣つゝぬ木槿手向る雫かな　風水

右

蕣よし富士の情やす垣ひとへ　松濤

左の句素堂翁調子の宜を仰ぐる右又山をかへても不二の猪一句のうけを思ひさとるには待されとも右の句切字なし又文字あまりしたる勝ハまれ字を加へ冬のくふう和歌やうのもの多きに残難しき持に定侍らんか

二番

左　勝　雲

秋よりは露押とかへす岬の茶　渓石

右

雲ゟ涼し扇をこふさしすゝよふよりふね　勇招

もの以そめふものけるものすゝきへ吹それふきの風や祝詠ふそと也ゆふとよみ出ひこのうちて便しき無ちの子をいふとふさしせ川も左の句さを待くふちのふたの句奇逸なれハやすけ侍ふんつし

三番

左　持

糸へ芝于月取うつくて夜無き句　コ斎

右

いけも捏朽失花くたもれし　文錦

ひらうの句花し深く入りて人の形容いふのしき家ゆう左の句とするさ待よく一ツ葉て取くみ者者を侍れたとさて答矢又わとめでたし仍持トス

四番

左　勝

松苗も松北千国もいゆかし気　松風

右

大将そも松北すさまし入日影　今峰

左の句木枯の吹雪して苗松のすまし入日影の風のやさしめよふ冬なものゝ寸松松影のすゝきをふくみて一句たけ高し右も又松北の風景を祈るく待れとも苗松の方や用ひる侍らん

五番

左持　細代

手をさし杯おかしろ事墓(?)さけし　心水

右

けしろ木のゆるふやうめく・おうれ　不角

あしろの声うちまさる作(?)えめつらしきやさし
ぬ又けしろの枝の行(?)すとらて言(?)を花やすしるけしき
左の遠(?)いとおもうし

六番

左勝　石蕉(?)

待れ登り浮(?)をき乱れて龍の年

右

はく咲や緒引まくし雪菜(?)の紙　立然(?)

右の句いちとのいゑのころまで見おそくるまじけん
その声(?)をゆかしきさらぬく地のしく待ろう引捨し(??)
右の句無(?)きてもしきうえ(?)ず仍以左為勝

七番

左勝　鴫

行野の奥うつるまで月見し(?)　嵐雪

右

野くくて葉(?)て千枝を捨(?)たる(?)れ　亀丸

すうての奥うつるまで白かきり(?)ぬし一句安(?)らかなるして
歳(?)宗(?)のけしき無(?)くりの妹くうれ秀(?)とせされハ六月廿
四日(?)の夕ときし(?)と云けんさるをとまや左の句を座(?)を脇(?)
ものしきぬるぬためしもはくれ手待れよま頃のものゝ
の

あら白鯛をもしらかいさん

八番

左　水柱

風の末て水柱にさうる楓の露　一瓢

右 勝

門閉て宋居そしゆつ水柱かな　琴風

水柱さらる楓の露の哀は深けれと[illegible]かくれもなし

水は楓の[illegible]して萩の[illegible]八水柱門を守る

宋居の庭[illegible]まさるやうに見ゆる

九番

左 おくれ

初わかその霰毎夜はなの音

李六

右

棗漆く咲る花はかゝれけれ　仲風

初風の威儀の宿見えて[illegible]かくてしこうまし

うつれ花もなを[illegible]又咲るゆかれの花く

ろむとるさま[illegible]の[illegible]耳[illegible]

そゝ能妻の月のさやまかきしはなきの見様

あらまて[illegible]さりし

十番

左 勝　祢糸

浄瑠璃やあやうき鏡浦あそかやのうらん　士来

右

跡よし紀ましまて柱の祢糸かな　孤屋

右の句さも有らぬやうなれど見れば
左ハ師走の水仙を写して窓の方より寒き様なれど
ミ勝るべし

十一番

左 勝 頭巾

山里や頭巾とらぬ人もなし

右 観水

頭巾きぬ日も寒し北中の風 兼文

めでたき山中の寒さなるを思ひて楓林とよむ
左ハ関守もさこそと思ひの心ありて人をいとほしく心
ミえてゆかしきなれ

十二番

左 蝶掃 茶白

なすすきはちるはうれ蝶のあそび

右 勝 不卜

蝶とらへ寺まで来ぬ御手の風

まことにさうなき状ひ寺を悦ぶ心を優しさ艶とす左ハ寺の
蝶掃とさへいふうちの先致書にや南面滑稽の中とも
ありそめ言かへにまみえたるに作りいとめでたし
のいまだひとへに行あるにてかくすれハ右勝

一物将不卜のめしハ寒き境に寺あるひとりそ春を
やさしき山の花をもとめてそれよりは花の茂さを
思ひ他方の月を雲にてうつして風雅の奴と思ふべし

まさく是より先と集ゆることてしふるしは柳なよふはいへ
ともまつ秋来く香ゆかし雨ならしつて春の我の菊と名
をきさんしよ夏の牡丹と花も之をてらす梅みては
さらしての無と杉年かれ時するなる人は白し文人を称
るらしむひあるそはけれ桃に入て蝶の高は清するつよ
きこえ本意をしひろひてあれすまちて種を思ひ
なりすれ士よりにしはも知しきて一つ者さしらふまとや
楽すえりさもの菊をめでまむすぬれりしいそへむ
ともまつ梅の園をあめは翁郎のゆるしかさんてしめさし
されは貞享卯のとしうまそに文の御すそしまさ願す
芭蕉の庵の柱大に對す